

のちに日本の医学界を背負ってたった錚々たるメンバーである。

明治二十一年（一八八八）七月五日、鷗外はベルリンを離れ帰国の途についている。

参考文献

- (一) 森林太郎『鷗外全集』岩波書店、昭和五十年
- (二) 山崎一類『二生を行く人』新典社、一九九一年
- (三) 富士川游『醫史叢談』昭和十七年。

（平成五年六月例会）

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

福島義一著

『聞き書き・医者のみた阿波史・新阿波医人伝』

著者は、昭和十年大阪大学医学部を卒業後、眼科学を専攻するがたわら、医史学的研究をされた。

研究方法の特徴は、常に現地を訪ねて資料を収集することである。この精力的研究方法を、昭和十九年四月に眼科学教授として赴任以来実行されている。

現在までに発表した著書、論文は極めて多いが、『日本眼科史』（昭和二十九年）、『阿波医学史』（昭和四十五年）、『徳島県医師会史』（昭和五十一年）、『阿波の蘭学者』（昭和五十七年）、

『徳島大学医学部史』第一卷（昭和六十一年）、『眼科学史の窓』（昭和六十二年）…等、がある。

そして、平成四年十一月、郷土医学史の研究に貢献した功労者として、日本医師会最高優功賞を授与された。

私は、長年月にわたる著者の不断の研究により、幕藩時代・明治・大正・現在に至るまでの多くの貴重な資料、人物等が埋もれることなく、医史学的に解明された、と思つている。

現在、著者は徳島市医師会史の編纂委員長として尽力されているが、収集した多くの資料のうち、医師会史には掲載されないが、捨てるには惜しい資料を収集したのが、本書である。

本書は、三編即ち、一、史編 聞き書き 医者のみた阿波史 二、探編 徳島市内の医史跡探訪記 三、譚編 史譚 筆のたわむれ に大別されているが、各編にわかり易い文体で記載されている逸話は、三十五以上にのぼっている。

それらの逸話のうちのいくつかを紹介したい。

阿波藩政時代の博物学（本草学を含む）の奇書（名著）として知られている『阿波産志』五十七巻、『淡州出品筆録』二巻、『阿波産志目録』一巻が、現在東京国立博物館に所蔵されていることを発見し、この編集に携わった方々とその内容に就いて調べられた。これは、徳島県にとつて極めて重要な文化財を、百余年振りに見出したことになった。

難産で苦しむ主婦に、提灯の柄についている鉄鉤を利用して、胎児の身体を載断し娩出した結果、無事母体を救うこと

に成功した賀川玄悦（一七〇〇—一七七七）を、阿波藩医として召しかかえた結果、阿波賀川流産科の名を高からしめた。

そして、明和二年（一七六五）玄悦が著わした名著『産論』（科学的な意味の最初の日本産科学教科書）を、文政八年（一八二五）有名な蘭館医シーボルトが、欧州医学界に紹介したが、そのオランダ語訳をした美馬順三は阿波藩士であった。

明治医制（明治七年、一八七四）示達にはじまり、明治二十八年第八帝国議会（一八九五）において、医師免許規則改正案がわずか二十七票の差をもって否決せられた結果、以後漢方を医師開業試験科目に加えることは認められずして現在に至っている。

この明治前期二十年ほどの期間に、漢方医たちが興した漢方医存続運動展開の歴史は、実に一種の漢方医学の受難史とも考えられる。

元阿波藩医井上肇堂（一八〇四—一八八一）は、四国における漢方医存続運動の中心となり、明治十一、二年頃から県下在住四百名に近い漢方医家を結集して医師職業集団を興し、これを済生舎と名付け（医師会のルーツ）、自らその社長に就任した。

明治十三年（一八八〇）一月十八日、漢方医療の普及と研修を目的として、済生社員二百余名の合資によって、私立徳島済生舎医院（病院とも称した）を徳島市に開設した。この本院開設にあたって肇堂は金二百円を寄付し、書籍機械類を無償で貸与し、更に一年間無給で奉仕したという。

この病院は、肇堂の指導と経営の妙を得て、患者は蝟集し、漢方研修の医学生も多数勤務し、盛大に発展しつつあったが、惜しくも明治十四年（一八八一）四月二十三日肇堂の逝去によって、病院事業は急速に衰退して、遂に廃止となり、四国における漢方医存続運動は自然に消滅してしまつた。

徳島市の中央にある眉山の山麓の寺町に潮音寺があるが、その墓所の無縁墓地に洋学者（蘭・英両国語に通じ会話もできた）であり、高名な医師でもあった井出三洋（一八三四—一九〇八）の墓石があることを発見し、その不遇な生涯に就いて詳述しておられる。

また、寺町の本行寺の近くで、洋学者兼初代衛生課長として防疫関係で活躍した興津春機（一八三四—一九〇二）の墓石が、横になつて放置されているのを見出され、その功績に就いて記述された。

逸話の多くは、各地と関連しているので、他府県の医史学研究者にも、参考にして頂ける点が少なくない、と思う。

（片岡 義雄）

〔徳島出版、徳島市幸町一—六、電話〇八八六—二一九三二、平成四年十月刊、A五判、三四〇頁、三〇〇〇円〕

三浦豊彦著『労働と健康の歴史』（第七巻）

『労働と健康の歴史』第一巻が刊行されたのは、一九七八年（昭和五十二年）で、爾後二巻、三巻……と続き、第七巻の刊